

女子学生が教授に恋

FLPジャーナリズムプログラムから 中大映像グループ



中央大学多摩・後楽園両キャンパス各所の大型ビジョンに流れた映像で、女子学生が教授に恋愛相談をする内容が話題になっている。公開相談にも等しいが、胸中を堂々と明かし、教授は真摯(しんし)に答える。何気なく見た人が画面にくぎ付けになったという、その映像の制作現場取材した。

学生記者 山口莉奈(経済学部4年)

出演は辻泉教授と高橋唯さん(法4)の2人。撮影は西田健介さん(法学部、2014年3月卒業)が担当し、インタビュアーは吉原朋輝さん(経4)。全員FLP辻ゼミの学生だ。<学内で見なかった人たちは、動画投稿サイト・Youtubeで『中央大学 恋愛相談』と検索してください>

●
トップページに出てきた映像には、2人が写っている。今回の主役で相談者の女子学生・高橋さん。そして回答者であり、彼女が属するFLPゼミの辻教授である。

「ゼミの教授に恋愛相談?」と不思議に思う方も多いかもしいが、この企画はいくら親しいゼミの教授とはいえ“やらせ”ではない。恋愛相談をし



ていた高橋さんの話を、たまたま聞いていた「とびうお」代表の吉原朋輝さんが映像企画にしようと思いついた。

映像が流れたあとに

吉原さんの発想は「学生にしか作れない映像を撮りたい」というシンプルなものだ。

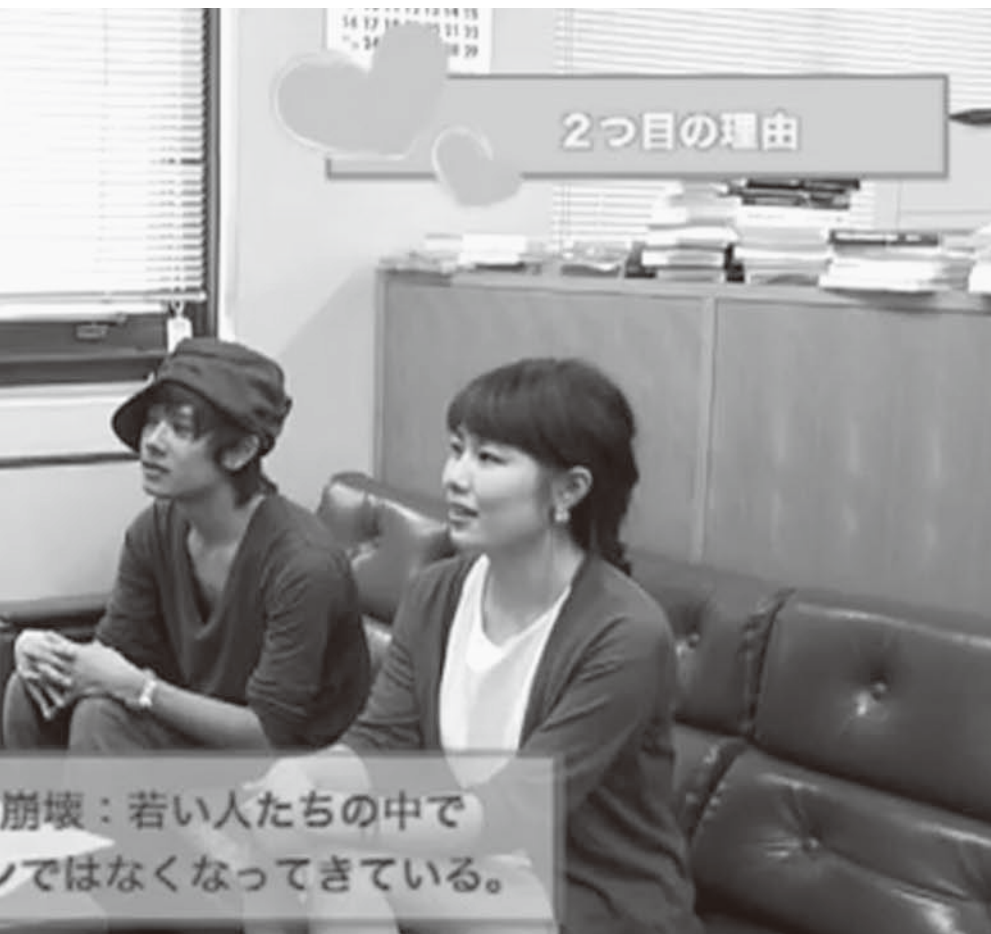
結果は反響が大きく、恋愛相談のインタビューが放映されてからというも

の、高橋さんは友人・知人からメール攻勢にあった。なかにはCスクエアやヒルトップで放映された画面を写真撮影し、見た証明であるかのように送ってくる人もいた。

高橋さんは「バレた!?というような、こそばゆい感覚」で、「最初はもちろん恥ずかしかったです」というが、Twitter(短文投稿サイト)で『かわいい』と言われることには素直にうれしそうだった。

愛 相談

派生した企画！ 「とびうお」制作現場



映像の1シーン、辻教授(左)がフリップで説明している。右端が相談者の高橋さん、中央は制作サイドの吉原さん

辻教授の感想は、周囲からの評判もよく、オルタナティブ(マスメディアに取って代わる新しい)メディアの実践にもなったと感じているという。

良いところも悪いところも素で取り上げられる媒体だからこそ、価値があり、現代に求められていることを実感できるのかもしれない。

視聴者からも好意的な声が多い。個人的な相談を公表したら好評だったというのは、学生が堅苦しくないバ

ラエティ番組的な要素を望んでいるのかもしれない。撮影担当の西田さんがそう締めくくった。

今後は

高橋さんのコメント、「ペットみたいな彼氏が欲しい」で締めくくられた今回のインタビュー。字面だけを見ると語弊があるので、疑問を持った読者は、ぜひ実際の映像を見ていただきたい。

就職活動を控えた大学3年生にとって、現実と理想の間を行き来するときがあるようだ。

辻教授は「オルタナティブメディアを通じた情報発信」について、今後も積極的に携わっていくという。今回の恋愛相談インタビューは、教授と学生の信頼関係の上に成り立った企画である。

そして従来の、学生から先生へというボトムアップ方式の信頼関係の築き方が「相互に求める関係」へと変化していつているのではないかと考察した。

社会学を専攻とする辻教授は本誌227号(2012年夏号)に本の紹介「夏休み 大学生に読んでほしい3冊」で登場して、ご存知の方もいるかもしれない。今回のインタビューを通して、辻教授の新たな魅力を感じ、より親しみやすい存在になれば、と制作者はいう。

映像担当の吉原さん、西田さんは次回作として他の教授に登場願う企画を考案中。ほかに「SNS疲れを持つ若者の実態」などの腹案もあるという。

視聴者と同じ視線に立つ番組を作るために奔走する彼らと、恋愛を選択科目として取り入れつつある最近の若者に、一筋の道を示す映像制作であったように思う。

出演者インタビュー

聞き手 学生記者 山口莉奈

——映像を撮るきっかけは

吉原さん「FLPでの経験をもとに、学生にしか作れない映像を作りたいかった。たまたま話しているのを聞いて面白そうで番組にしたかった」(真面目な顔で)

辻教授「彼氏ができないんですっていう相談を高橋さんが私にしてきて…」

社会学的恋愛相談

——プライベートで

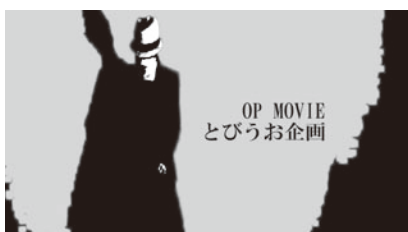
高橋さん「そうそう、社会学的な見方から教えていただこうと思って!(うれしそうだったが)吉原さんは立ち聞きしたんですよー」

——出演したあとの感想は

高橋さん「恥ずかしかった!友達から写メが送られてきて、ばれた!と言う感覚だった」

辻教授「その中に彼氏への立候補はなかったの? Twitterでは高橋さん、かわいって話題でしたよ」(面白そうに)

高橋さん「え、保存しとく!」(かなりうれしそう)



辻教授「でも、僕の意見は80年も前のものみたいで古いって言われました…(腑に落ちない表情)

西田さん「教授というだけで、古いって思われるのかもしれないですね」(冷静に)

辻教授「授業でも見せましたよ」

高橋さん「え、何人くらいにですか?」

辻教授「小教室では30人くらい」

高橋さん「小さくないじゃないですか!」

辻教授「大教室は150人くらいでした。番組の結論がペットの彼氏募集で終わったから、次はペット探しの番組ですかね」(苦笑)

西田さん「本来個人的な相談を表に出したら意外とレスポンスが大きかったということは、今はあまり堅苦しくないものが求められているという証拠かもしれませんね」

全員「そうですね」

吉原さん「学生と教授のああいいう緩いプラットホームって、今の大学に対する挑戦だと思っんですよね」

辻教授「それって言葉はすごいけど、何を言いたいのかよくわかんないね」(笑)

『タモリ倶楽部』の発想

——先生に収穫はありましたか

辻教授「ネット上での拡散の勢いもすごかったし、恥ずかしかったですが、まるでソーシャルメディア上での化



話題を呼んだ映像の制作メンバー。
左から辻教授、吉原さん、高橋さん、西田カメラマン(撮影・山口莉奈)

学反応を見ているかのようでしたね。情報発信に反応が加わってどんどん変わって行って形になりますからね(にこにこ)。驚きの低予算で大きな反応っていう、まるで『タモリ倶楽部』の発想ですね」(笑)

西田さん「われわれは既存のメディアを打ち破りたいと思っています」

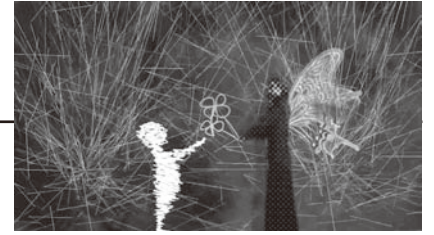
吉原さん「定型文、意識しちゃうよ」

辻教授「マスメディアじゃないオルタナティブメディアを通した情報発信の実践でもありますしね。堅苦しくない素の映像を見せたことで反応があって、マスメディアにはできないことをやりたかったんですよ」(授業のときの顔)

西田さん「もともと先生を題材にした動画を作りたいって言ってたよね」

吉原さん「教授ってみんなが思っているよりも人間味に溢れていて、趣味とかもあって、そういう一面を見ることがでもっと授業にも興味を持ってくれたらいいなという思いもあります。(しんみり) 今後は大学の教育現場を映像化できたらいいなと思って」

西田さん「もっと自分のいる大学を好きになってほしいよね。自分たちが大学を作っているんだという意識。能



動的な気持ちになってほしい」

全員(納得)

辻教授「他でできないことをやったのは大きいよね。広報誌やPR誌だといいいところしか書かないけど、素を見せられたから」

西田さん「それを出来たのは先生のおかげですよ。普段からFLPゼミでも学生主導で進めてくれるように、先生の懐の大きさが距離を縮めていますよ」(真面目に)

辻教授「そこ太字にしといて」(笑)

全員(笑)

次回作はSNS!?

——今後の活動は

高橋さん「彼氏の代わりはペットで

いいなって思っていたんですけど、ペットみたいな人いませんよ。(困っているけど笑顔)今、人生に迷っています」

——就職活動もありますから

高橋さん「故郷の岩手がいいか東京か、結論が出ないんです」(悩み顔)

辻教授「次、就職編の高橋さんを追跡しますか」(微笑)

——映像スタッフの今後は

吉原さん「若い人たちの悩みを映像で解決するような、ソフトな学問を提供していきたいですね。新しい発見をしてくれるような番組にしたい」

高橋さん「第2弾のお悩みは何を取り上げますか」

吉原さん「SNSとどう付き合っていくたら、若者は幸せなのかっていうのは興味ありますね。LINE(ライン)＝無料通話アプリ＝の既読機能は幸せなのか?とかね」

全員「いいですねー」(声上向き)

辻教授「SNS疲れだけで1本番組撮れそうですね」

吉原さん「あと『恋するフォーチュンクッキー中大ver.』も早く撮りたい」

高橋さん「なるほどね」

西田さん「形に縛られず、メディアで遊ぶゼミでありたい」

全員「たしかにそうですね。また頑張らしましょう」

取材を終えて

映像から大学を変えていく

学生団体「とびうお」は映像を通して中央大学を変える、という団体理念のもとに活動している。その代表を務めるのが、吉原朋輝さん(経4)。

今回の「恋愛相談インタビュー」も彼のアイデアと実行力でスタートした企画の1つである。

受動的な学生とそうした学生に訴えかける教授という光景は、私も含め、誰もが心の底で疑問を持ちながらも、当たり前と化している日常の授業風景ではないだろうか。

大教室でもインタラクティブ(双方向)な関係を望む教授はたくさんいるはずである。しかし、大教室で発せられた教授の問いかけに一体何人の学生が挙手をして発言するだろうか。

そんな光景もゼミになると少し雰囲気が違う。教授の存在を近くに感じ、その教授がどんな人でどんな気持ちで授業に臨んでいるか、感じ取ることが出来るようになると学生はいつもより少し前のめりに、積極的に授業に参加するようになる。

そんな関係を築きたいのは、学生も同じではないか。そう思った吉原さんが映像を通してもっと学生と教授の距離を縮めたいと望んだ形の1つがこの恋愛相談であった。

学生が教授に恋愛相談をする。一見ありえないことを、バラエティー風に撮影し、放映する。学食やCスクエアで見た人もいるかもしれないが、あの映像には教授を尊敬しながらも親近感を持って話す女子大生と、それに真摯に、そして同じ目線で話す教授がありのままに映されている。

1対1で向き合うと、教授も学生と同じ人で、決して学生から程遠い存在ではない。教授は伝えようとして授業に臨み、学生は学ぼうとして授業に臨んでいる。

あなたはどんな気持ちで授業に向かっているだろうか。

もし、この記事であの映像を思い出したら、ぜひ次の授業で教授の顔を見てみてほしい。大教室では小さくしか見えない教授の顔は、あなたが考えるものと少し違うかもしれない。

自分の行動で誰かを動かすというのは、予想以上に困難である。しかし、それに臆することなくチャレンジすることで少しずつでも変わるかもしれない。

「とびうお」の映像で中央大学が少しずつでも変わっていったなら、それは吉原さんだけでなく中央大学という名を背負った全員にとって幸せなことではないだろうかと思ふ。(山口莉奈)